

俳句の授業

●東筑紫学園高等学校教諭

一宮聡

(このみや・さと)

■はじめに

現代文の韻文教材は嫌だ。詩も短歌もできればやりたくない。まして俳句となると生理的に受け付けない。そんな国語教師もいるのではないでしょうか？

大根の葉が流れようが、牡丹の花が落ちようが、「それが何なの？」と突っ込まれるともう自信喪失です。指導書に書いてある内容はどれも似たようなもので、俳句を扱う時だけはすべての教師が山本健吉になって鑑賞を押しつけています。

かといって生徒に俳句を作らせてみても、放っておくと「標語コンテスト」になりかねません。いつそ教科書の制約を離れて、ゲーム感覚で俳句が教えられないものかと考えてみました。「俳句は、ある情報を最小限の言

葉で伝達するゲームである」という定義のもとに、授業を展開していくのです。

■まずは俳句への興味を

俳句といえは五・七・五に季語がつきもの。「や」とか「かな」とかの切れ字をトッピングして、出来上がったものはよくわからない…。と生徒は思っています。ここは自由律俳句に登場してもらって、生徒の興味を喚起しましょう。

授業の中でよく話題になるのが、「一番短い俳句は何か？」ということ。少し知っている生徒なら、尾崎放哉の「せきをしてもひとり」を挙げるところですが、種田山頭火に「雪はしぐれか」というのがあります。さらに探せば、橋本夢道の「動けば寒い」。さすがにこれが最短だと思っていたら、ありました凄いのが。

陽 へ 病 む (大橋裸木)

こうなる鑑賞するというより、そのインパクトに脱帽するしかありません。

ここまで話すと、「じゃあ、『あ』という俳句を作れば記録更新だ。」などと言う生徒が必ず出てきます。そして、「しめしめ、つかみはOK!」と教師はほくそ笑むのです。

一文字に勝る文芸はないだろうと思っても、世の中そんなに甘くありません。俳句ではありませんが、草野心平の詩にとんでもないものがあります。(御存知ですか) 題は「冬眠」。内容(?)は、ページの真ん中に「●」だけ。それでも十分に「冬眠」という情報を伝えているからさすがです。

■オノマトペで感性を磨く

後述の解説を読んで、次の俳句の空欄に入る擬音語を考えなさい。(平仮名で書くこと)

鳥わたる [] と罐切れば (秋元不死男)

敗戦の傷跡も生々しい秋空の下、戦時下の獄中生活から解放された作者は、解放感を嘯み締めつつも、今日を生きんがために缶詰を切る。その物悲しい響きは空を行く渡り鳥の羽音にも通じるようであり、生の哀感を滲ませている。

句の背景を先に教えるのは反則のようですが、こと俳句に関しては、先付けもありです。正しい鑑賞よりも、言葉のセンスを重視しましょう。(正解は「ききききき」)

生徒A：「ききききき」

多数派の回答です。作者の感性に近いようですが、「ききききき」では金属的な響きが耳につき、いまひとつ角が取れていないくらいがあります。

生徒B：「まこまこまこ」

一見ふざけているように見えて、徳用のパインの缶詰の、あの胴太の空間に共鳴する音の響きがよく表現されています。

生徒C：「きりきりきり」

「ききききき」よりも大らかな音です。きつこの生徒の缶詰の直径は七寸五分でしょう。(冗談です)

生徒D：「ばかんばかん」

一瞬?…しばらくしてはたと気付きました。今の生徒たちは、缶詰を使うことはないのですね。ほとんどがプルトップ缶ですから。追体験が難しい句を教えるのは大変です。「水枕ガバリと寒い——」も解るかどうか。

■さまざまな比喩の可能性

次の俳句の空欄に入る言葉を自由に考えなさい。

[]のごとく汗して歩くなり

この問題は私が考えたものなので、正解は無限にあります。何人かの生徒を指名していく中で、次第に表現に深みが出てきました。

生徒E：「夕立」—— 月並みですね。

生徒F：「スイマー」—— 濡れてるだけじゃん。

生徒G：「暑い日」—— 暑いから汗でしょうが。

生徒H：「サラダ油」—— なかなかいいですね。

このあたりから生徒の回答は、濡れている状態よりも汗そのものの比喩に向かっていきます。「水飴」「泥水」「シャンプー」「粘液」と、総じてヌルヌル感や気持ちの悪さを表現しようとしているようです。教師はあえてコメントをせず、事の成り行きを見守りましょう。そして、生徒I：「肉汁のごとく汗して歩くなり」

最後にいい比喩が生まれました。真夏の暑い日、汗だくで歩いている時の不快感がよく表現できていて、「肉汁」という短い言葉の持つ情報量はかなり多いのではないでしょうか。

■「エチュード」で創作を

演劇では、提示されたシチュエーションで即興の芝居を演じる練習を「エチュード」と言います。授業の仕上げとして、このエチュードに基づいた俳句作りをさせましょう。文章にすればかなりの量になる情報を、いかに

短く表現するか。そこには俳句の眼目である「省略」の力が必要になります。

あなたは真夏の喫茶店で、恋人を待っています。約束の時間はとくに過ぎていないのに、恋人はやってきません。そんな時の気持ちを、俳句で表現してください。（五七五の定型で詠むこと）

生徒には、あらかじめ夏の季語の一覧を配布しておきます。「有季定型」というオーソドックスな形での創作が、表現の制約をより多くし、生徒にある種の緊張感を与え、ことができるからです。

授業の様子や個々の生徒の作品を述べるには紙面が足りません。多くは「恋人を待つや真夏の喫茶店」のような状況説明だけの駄句でした。しかし、クラスに四、五人は「俳句」と言えるものを作っています。ここでは一番評価の高かった句を紹介してこの文章を終ることにします。「ある情報を最小限の言葉で伝達する」という最初の定義にどれだけかなっているか、皆さんで判断してください。

冷房やストローの袋また畳む